

# 高松院と澄憲

表白の検討を中心に

筒井早苗

On Takamatsu'in and Choken : Focusing on an Examination of the Hyōbyaku of Chōken

TSUTSUI Sanae

はじめに

- ① 高松院の病と出家
- ② 高松院による美福門院追善供養
- ③ 高松院の出生と聖天供表白
- ④ 高松院の崩御と澄憲による追善供養  
おわりに

## 【論文要旨】

高松院妹子は二条天皇の后となるものの、天皇との婚姻生活はわずか四年ほどで破綻してしまう。その後は出家を遂げ、女院に列せられて高松院と称し、静かな仏道生活を営んでいると思われたが、唱導の名手として名高い澄憲との間に、密かに海恵、八条院高倉という二人の子を儲けていたことや、さらに女院の早世の原因が澄憲の子を出産したことに伴う疾患であったことなどが、角田文衛氏や田中貴子氏により明らかにされている。

これらの研究により、高松院と澄憲との密通関係は明白であるが、日記や寺院文書などに見られる断片的な記事の分析が中心であったため、これまで二人の具体的な関わりはほとんど見えてこなかった。本稿では、国立歴史民俗博物館蔵田中家本『転法輪鈔』や金沢文庫蔵の澄憲草の表白を中心に、高松院との関わりが見られる表白の内容を検討し、二人の関係性を捉え直した。

澄憲は、高松院の病を癒すための祈禱をしたり、美福門院のための追善供養の導師

を勤めたりして、出家後の高松院の人生を導いてきた。二人の関係は、導師と施主という信仰を媒介とした積み重ねをとおして深まっていたといえる。

高松院は後半生の導き手として、十五歳年上の優れた唱導僧である澄憲を尊敬、信頼し、彼を重用した。澄憲もまた、聖天供表白に見られるように、高松院に対して導師という立場以上の感情を抱いて接し、女院の死後も懇ろな追善供養を営んで、女院とのつながりを保ち続けていたのである。

澄憲の表白は公や他者のために作成したものが大半を占め、それらからは澄憲の教養や巧みな表現力、教説や信仰などを読み取ることができるが、澄憲の心情や内面を示すものは数少ない。そういった意味でも、高松院との関係性の中で自身の率直な心情を述べて祈願した天供の表白は大変貴重であり、今後の澄憲研究にとって有用な資料となり得ることを指摘した。

【キーワード】 高松院、澄憲、表白、『転法輪鈔』、唱導

## はじめに

高松院妹子（永治元年（一一四一）～安元二年（一一七六））は、鳥羽天皇と美福門院得子との間に生まれた皇女である。恵まれた環境のもと両親の寵愛を受けて育ち、長じて二条天皇の后となる。しかし、天皇との婚姻生活は長く続かず、わずか四年ほどで破綻してしまう。その後は出家を遂げ、女院に列せられて高松院と称し、静かな仏道生活を営んでいると思われたが、唱導の名手として名高い澄憲との間に、密かに海恵、八条院高倉という二人の子を儲けていたことや、さらに女院の早世の原因が澄憲の子を出産したことに伴う疾患であったことなどが、角田文衛氏や田中貴子氏により明らかにされている<sup>(1)</sup>。

これらの研究により、高松院と澄憲との密通関係は明白であるが、日記や寺院文書などに見られる断片的な記事の分析が中心であったため、これまで二人の具体的な関わりはほとんど見えてこなかった。本稿では、国立歴史民俗博物館蔵田中家本『転法輪鈔』（以下、歴博蔵『転法輪鈔』と表記）や金沢文庫蔵の澄憲草の表白を中心に、高松院との関わりが見られる表白の内容を検討することで、新たに知り得た情報を整理し、二人の関係性を捉え直したい。

## ① 高松院の病と出家

澄憲は高松院の御持僧であったのだろう、さらに高松院と澄憲は、二人の子である海恵が生まれた前年の承安元年（一一七一）頃には関係していたと角田氏により指摘されているが、二人はいつ頃から接点をもつようになったのだろうか。

高松院は永暦元年（一一六〇）の早春頃から参内せず、母・美福門院

の里第である白河押小路殿に下がっていた。同年秋には病魔に侵され、危篤状態となる。『山槐記』永暦元年八月十九日条には、次のようにある。

今暁中宮依御悩危急有御出家云々、院去夜有御幸、暁天還御云々、先々此事御発心之由粗有其聞、然而依上皇御制止不令遂御也、（下略）<sup>(3)</sup>

高松院は重病のため命の危機に直面し、出家を遂げる。以前から女院は出家を願っていたが、異母兄の後白河上皇の制止により、思いとどまっていた。今回の病を機に、女院は素意を遂げることになったのである。

この出家の時期に高松院と澄憲が接触していたことを示唆する資料が存在する。金沢文庫蔵の澄憲草「為母儀聖靈勸人書写観無量寿経十二卷并被修一昼夜念仏発願表白」<sup>(4)</sup>（所蔵番号3470）は、高松院が亡き母・美福門院のために行った御月忌追善供養の表白を澄憲が作成したもので、これについては次章で詳しく取り上げるが、その表白の末尾に、「高松女院笠置如法供養表白」として、以下のように記されている。

禪定女院 自□歷元年八月廿日、始<sub>テ</sub>三七ヶ日法花三昧行法<sub>ヲ</sub>、同九月十日十一日両日、如法如説書写妙法蓮。

以下に続く表白の本文自体は失われ、その内容は知ることができない。「高松女院」「禪定女院」と記されているので、この表白自体は女院号を宣下された後に作成された可能性があるが、この残闕部分からは次のようなことが予想される。「□歷元年」の初めの文字は読み取りにくく不明であるものの、「歴」は「曆」に通じ、高松院の存命期間中の元号で「曆」がつくのは「永暦」のみであることから、おそらく「永暦元年」を指すと思われる。永暦元年八月二十日であるならば、高松院が出家を遂げた

翌日であることになる。女院は出家した翌日に三七ヶ日法華三昧行法を始め、同年九月十日、十一日には法華經書写を行ったのではないだろうか。

この記事は、澄憲が高松院のために作成した表白の末尾に付されていることや（写本の表紙中央には「澄六」として、澄憲の表白であることが示される）、同じく高松院のための供養表白であることから、これもまた澄憲が女院のために行った法会の表白であると考えられる。よって、高松院は出家直後から澄憲に依頼して供養を行っており、二人は永暦元年八月の女院出家後にはすでに接点をもっていたといえる。

二人が接点をもつ契機をもたらしたのは、高松院を異母妹として寵愛し、澄憲への信任厚かった後白河上皇だったのではないだろうか。後白河上皇は、先述したように高松院の出家直前に重病の女院を訪問していることから、女院の病が癒されるよう、澄憲に祈禱を依頼したのかもしれない。

さらに、金沢文庫蔵『転法輪鈔』「高松院日吉社七箇日金泥御経供養開白」には、次のように記される。

方今禪定女院宿縁之所催<sup>ラス</sup>深奉<sup>ル</sup>婦<sup>シ</sup>山王之明德<sup>ニ</sup>信力之所<sup>レ</sup>至  
 類<sup>リ</sup>呈<sup>ハス</sup>水月之感<sup>レ</sup>応<sup>ヲ</sup>去年<sup>ノ</sup>夏天<sup>ノ</sup>貴<sup>ニ</sup>躰<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>預<sup>ス</sup>事<sup>御</sup>葛氏<sup>ノ</sup>之<sup>方</sup>少<sup>ク</sup>レ<sup>レ</sup>驗  
 扁鵲<sup>ノ</sup>之<sup>術</sup>不<sup>レ</sup>リ<sup>キ</sup>及<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>運<sup>ヒ</sup>信<sup>力</sup>於<sup>七</sup>社<sup>權</sup>之<sup>冥</sup>助<sup>ニ</sup>一<sup>發</sup>願<sup>念</sup>於<sup>造</sup>  
 仏<sup>一</sup>写<sup>経</sup>之<sup>勝</sup>善<sup>ニ</sup>願<sup>力</sup>潜<sup>カニ</sup>通<sup>ス</sup>如<sup>臨</sup>谷<sup>ニ</sup>發<sup>ス</sup>カ<sup>ニ</sup>音<sup>ヲ</sup>感<sup>應</sup>忽<sup>ニ</sup>至<sup>ル</sup>似<sup>タリ</sup>  
 向<sup>テ</sup>鏡<sup>ニ</sup>見<sup>ル</sup>レ<sup>ニ</sup>像<sup>ヲ</sup>御<sup>惱</sup>平<sup>癒</sup>シ<sup>玉</sup>躰<sup>安</sup>穩<sup>ナリ</sup>仍<sup>為</sup>メ<sup>ニ</sup>賽<sup>カ</sup>ハ<sup>リ</sup>マ<sup>ウ</sup>シ<sup>セ</sup>シ<sup>カ</sup> 彼<sup>神</sup>恩<sup>ヲ</sup>  
 「展<sup>此</sup>ノ<sup>齋</sup>筵<sup>ヲ</sup>御<sup>者</sup>也<sup>（下略）</sup>」<sup>⑤</sup>

女院は去年の夏に病にかかり、名医による治療を施してもなかなか癒えなかったが、澄憲の導きにより日吉社に祈願したところ、忽ちに癒されたという。この表白に続く「同結願表白於十禪師宮」被結願之」に

は、「自仲秋八月下旬五日<sup>ニ</sup>至<sup>マテ</sup>涼秋九月上旬之今朝<sup>ニ</sup>一七日<sup>參</sup>籠<sup>シ</sup>日吉社頭<sup>ニ</sup>七度<sup>勤</sup>修<sup>シ</sup>嚴重<sup>ノ</sup>齋會<sup>ヲ</sup>就<sup>テ</sup>七社<sup>ノ</sup>宝前<sup>ニ</sup>各<sup>瑩</sup>金銅鏡像<sup>ヲ</sup>為<sup>メ</sup>七社法藥<sup>ノ</sup>一各<sup>寫</sup>御<sup>金</sup>字<sup>妙</sup>典<sup>ヲ</sup>今日<sup>當</sup>テ<sup>結</sup>願<sup>ノ</sup>之<sup>日</sup>一就<sup>テ</sup>當<sup>社</sup>ニ<sup>展</sup>齋<sup>筵</sup>ヲ<sup>御</sup>者也<sup>（下略）</sup>」とあり、この供養が八月二十五日から九月上旬まで七日間にわたり行われた旨が記される。

これらの表白には供養をした年が記されておらず、いつ行われた供養なのか判然としない。高松院が重病にかかったという史料は、永暦元年の出家直前の病以外には見当たらないため、ここで言及されている重病が永暦元年の病を指すことも考えられる。一年後に行われた病回復の感謝供養の期間も、八月二十五日から九月上旬までであり、永暦元年八月の病や出家の時期と重なっている。大谷大学図書館蔵十二卷本『表白集』巻五には、「高松院奉為美福門院追善表白」が収められているが、その表題には「于時中宮也」という注記が付されており、正式には中宮であった時の表白でも「高松院」と表記されている。これらの表白についても、女院号宣下以前に作成された可能性はあり得る。

しかし、表題には「高松院」と記されるだけで、特に中宮であった旨の注記もないので、院号が宣下された応保二年二月五日の後に行われた供養表白と考えるのが妥当であろうか。女院はある年の夏に名医にも癒しがたい病にかかったにも関わらず、澄憲に依頼して日吉社に祈願したところ、思いがけず病が癒された。その一年後に病気回復の感謝を込めて、この供養を行ったようである。

いずれにしても、澄憲の導きにより日吉社に祈願し、癒され難い病が忽ち治ったということから、澄憲は女院の命の恩人ともいえるべき存在であることは確かである。この一件によって、澄憲は女院から絶大な信頼を寄せられたことであろう。

また、この供養が十禪師宮で行われたことが注記されるが、「当時ひろく一般の信仰を集めていたのは十禪師であり、『転法輪鈔』も例外で

はない。というより、澄憲の表白がそうした信仰を助長したのである」と小峯和明氏により指摘されており、澄憲の意向を踏まえてこの供養が行われたと考えられる。

## ② 高松院による美福門院追善供養

高松院は出家後、澄憲を導師として、亡き母・美福門院のための追善供養を何度か行っている。その折の表白が三点残っているので、この章ではそれらに着目したい。

① 金沢文庫蔵、澄憲草「高松女院十箇日御修善結願表白」(所蔵番号31480)

高松院が澄憲に依頼して、鳥羽法皇と美福門院のために行った御修善結願表白である。普賢菩薩の行法と舍利供養を行って、両親が極楽往生できるように祈願している。女院は施主として、特に美福門院のための御月忌供養を行ったが、父・鳥羽法皇のための御忌供養にも参列した記録が残っており、両親のための追善供養を重んじていた。

冒頭に「自今月上旬第六日、殊十ヶ日之間」とあり、ある月の六日から十六日まで行われた供養であった。何年に行われたかについては、本文から推測できる。表白中に「彼汾陽県、□水、咽悲涙一而七年、慈母門、暁月、陰愁雲一而三歳」と記され、父が亡くなって七年、母が亡くなって三年の月日が流れていることから、鳥羽法皇崩御の保元元年(一一五六)、美福門院崩御の永暦元年(一一六〇)を踏まえて考えると、この法会が行われたのは応保三年(一一六三)ということになる。

この供養をするに至った経緯は、表白中に以下のように記されている。

就中金光妙経四卷有希代、子細。法皇始写第一卷、露点未終功、

靈駕永無帰、母儀継第二卷。三軸不終書写、一期忽恨運命。妙典、僅四卷、願主、既二代也。故做双親、御筆、催一心、悲願。今揮、千行、驚、兩軸。

父・鳥羽法皇が始め、母・美福門院がその遺志を受け継ぎながらも完成できなかった金光明経書写を、娘の高松院が完成させて、二人への追善供養としたのである。金光明経は鎮護国家經典の一つで、天皇とその皇后の志を継いで皇女である高松院が完成させることは、個人的な供養を超えて、重要な意味を持つものであったと思われる。

② 醍醐寺三寶院蔵、澄憲「表白集」上「高松女院百花供養表白 奉為美福門院」(東京大学史料編纂所の謄写本による。請求記号2014-38)

美福門院のための御月忌供養表白である。「図絵弥陀如来之尊容、書写々々々々々、調百色之妙花、展一日之齋筵、然則、妙花交、皆散安樂界之空、濃艶施匂、併供弥陀仏之前」などとあるように、阿弥陀仏に百花を供えて母の追善供養をし、極楽往生を願うという法会である。この供養の旨趣は次のように記される。

御願旨趣何者、四恩同恩、尤深者父母之恩也。二親共親殊、厚者、母儀之徳也。是以蒼海三千之底深、比スレハ徳海、一惟浅シ。迷慮八万之峯高トモ、喩ハ恩山、一還下。其故、十月宿聖胎、一誕生之間幾ノ苦シテ一日施鍾愛、一育養之程幾情シテ歴劫、一難報其恩、一隔モ生、一難忘其徳、一者也。

父母・国王・衆生・三宝という四恩のうち、最も深いのは父母の恩であり、父母の徳のうちでは母の徳が殊に厚いという、澄憲特有の母恩を重んじる教義が展開される。高松院は、「是以念念報恩謝徳、御願、追レ

日無<sup>レ</sup>空、時々追福修膳<sup>ヲ</sup>御營、経<sup>レ</sup>歳多積<sup>レ</sup>リ」とあるように、母への報恩のため、長い年月にわたって追福修膳の営みを積み重ねていた。①は美福門院が崩御して三年後の供養表白であったが、これは門院の崩御から随分時を隔てた時点での表白のようである。続いて表白には以下のよう<sup>ニ</sup>に記される。

然猶七月孟蘭期、秋始追福善御營、如希仲冬聖忌待。冬来一年一度之齋<sup>ニ</sup>、仍毎月<sup>ニ</sup>企一日之修善、方欲<sup>レ</sup>修<sup>ニ</sup>御月忌之齋<sup>一</sup>也。今月者初<sup>ニ</sup>吉<sup>一</sup>日、後<sup>ニ</sup>即可<sup>レ</sup>定<sup>ニ</sup>廿三朝<sup>一</sup>者也。

高松院はこの年、七月に孟蘭盆供養を行い、美福門院が崩じた十一月二十三日にも法会を開いて、その後は毎月一度の御月忌供養を行う旨を表明している。この百花供養はいつ行われたのか不明であるが、③の「為母儀聖靈勸人書写観無量寿経十二卷并被修一昼夜念仏<sup>ヲ</sup>、仙殿中<sup>ニ</sup>」とあり、去年の冬の半ばに百花を阿弥陀仏へ捧げる供養を行ったとあることから、この記述は②の表白の百花供養を指していると考えられる。つまり、この②の百花供養を行った後、翌年の春の初めに一昼夜の念仏供養を行い、③の「為母儀聖靈勸人書写観無量寿経十二卷并被修一昼夜念仏<sup>ヲ</sup>」の供養が行われたのではないだろうか。

③ 金沢文庫蔵、澄憲草「為母儀聖靈勸人書写観無量寿経十二卷并被修一昼夜念仏<sup>ヲ</sup>願<sup>ニ</sup>表白<sup>一</sup>」(所蔵番号31479)

「当母儀聖靈御月忌、展開講齋<sup>ヲ</sup>」とあるように、これも美福門院の御月忌供養である。高松院は一昼夜念仏を修し、院中の男女に観無量寿経十二巻を書写させて、浄土信仰に基づく供養を行っている。この表

白でも、母の徳の尊さが強調されている。

夫悲母者是託生之源也、誕生者則經苦<sup>ヲ</sup>之基也。故受生者以母息<sup>ヲ</sup>為家<sup>一</sup>也、為子者以母徳<sup>ヲ</sup>為勝<sup>一</sup>也。尺尊、企九旬安居<sup>ヲ</sup>、目連、始七月孟蘭<sup>ヲ</sup>。功利、風永聞、淨施、露遠霑<sup>ヘリ</sup>。皆是標<sup>シ</sup>母儀尤尊<sup>一</sup>、示母徳至重<sup>一</sup>。

積尊と目連の亡母供養説話は、②の表白においても、「故積尊者妙覺之如来也、猶報九旬安居於摩耶之志<sup>ニ</sup>」。目連者漏尽之聖人也、又設<sup>ニ</sup>七月<sup>ノ</sup>孟蘭<sup>ヲ</sup>於悲母之訪<sup>ニ</sup>」と引用されており、澄憲によって繰り返し用いられる説話であった。

澄憲は高松院に代わって、母への思いを巧みに表白の中で表現している。この表白では、「嗚呼鶯來燕去、永不歸<sup>一</sup>者母儀恩愛御姿<sup>ヲ</sup>。花開葉落、再不見者聖靈慈悲之若顔<sup>ナリ</sup>」と、会いたくとも二度と会うことができない母への募る思いを対句で表し、②の表白では、「伏惟母儀聖靈、塗山之月忽隱<sup>テ</sup>、捫天之夢空驚<sup>キ</sup>、嬌洒風永<sup>ク</sup>慘<sup>テ</sup>、切利雲一隔<sup>シヨリ</sup>以來、隔花容<sup>一</sup>而三千、恋慕<sup>ノ</sup>涙無<sup>レ</sup>乾、失瑤裙<sup>ヲ</sup>幾<sup>ノ</sup>日<sup>シテ</sup>、別離<sup>ノ</sup>悲未<sup>レ</sup>休、朝雲暮雨時<sup>トシテ</sup>而莫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>恋<sup>ニ</sup>古徳<sup>一</sup>。春花秋<sup>ノ</sup>月事<sup>トシテ</sup>而莫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>ニ</sup>昔<sup>ノ</sup>恩<sup>一</sup>と、癒されがたい母との別れの悲しみが切々と綴られている。高松院は澄憲の表白をとおして、亡き母への恋慕の思いを新たにし、澄憲の導きに促されるようにして、追善供養を定期的に営むようになっていったのではないだろうか。

美福門院が崩御したのは、永暦元年十一月二十三日のことである。門院は高松院がこの年の早春頃から参内せず、里第に下がったまま、八月には出家してしまうという事態を見届けてから亡くなっている。美福門院は母として娘の行く末を案じながら亡くなったに違いはない。守仁親王(のちの二条天皇)との結婚は、鳥羽法皇と美福門院の意向で決められ

しており、美福門院は、自分の養子にして多大な期待を寄せていた守仁親王と娘との結婚が、うまく行くようにと心から願っていたであろう。その結婚が間もなく破局を迎え、高松院は美福門院に対して申し訳なく感じていたことが予想される。こうした思いが母への追善供養を行う原動力の一つになっていたと考えられる。

また、母への追善供養は一般的に当時よく行われており、五障ある女人である母のために繰り返し供養をして後世を弔うのは、娘として当然のことではあった。こうした状況に加えて、澄憲の母恩重視の教義や巧みな表白の言説に導かれて、美福門院のための月忌供養を行うに至ったのではないだろうか。

さらに、高松院亡き後はその遺志を継いでか、高松院の姉・八条院が美福門院のために御月忌供養を行っている<sup>(13)</sup>。日記類には、正治元年（一一九九）七月二十三日を始めとして、八条院が亡くなる三年前の承元二年（一二〇八）十一月二十三日まで、『明月記』を中心に数多く記録されているが、このうち『明月記』正治二年十一月二十三日条、建仁元年（一二〇一）十一月二十三日条、承元二年十一月二十三日条には、聖覚が導師や講師を勤めたことが記されている<sup>(14)</sup>。高松院から八条院へ、澄憲から聖覚へと、自分の血族を大切にし、母恩を重んじる澄憲の思いが要となって、美福門院の御月忌供養が続けられていったことは興味深い。

### ③ 高松院の出産と聖天供表白

歴博蔵『転法輪鈔』仏供養・修法・結縁灌頂<sup>天台</sup>・秘教の帖には、澄憲が自らのために行った聖天供祭文二点が収められている。

「為自身祈令修聖天供祭文」は、金沢文庫蔵『転法輪鈔』密教上「為自身祈令修聖天供祭文 供師無動寺円雲内供、後為法印」に同定される

が、金沢文庫蔵本は後欠である。「為小堂供養祈修同供祭文」は、金沢文庫蔵本では末尾の「安元々年十二月十七日権大僧都<sup>某</sup>敬白」の部分のみ伝わり、他の部分は欠けていることから、澄憲と高松院の関わりを知るために、歴博蔵『転法輪鈔』は大変重要な資料であるといえる。これら二点の表白を中心に、澄憲の女院に対する心情を捉えてみたい。

#### ① 歴博蔵『転法輪鈔』仏供養・修法・結縁灌頂<sup>天台</sup>・秘教「為自身祈令修聖天供祭文」

嘉応二年（一一七〇）四月十日に澄憲が自身のために行った聖天供（歡喜天供養）の祭文である。

方今、大聖歡喜天者隱上聖之形、同下部之類、出方便善巧之門、交毘那夜迦之身。帰信之者願念竊相通、供養之者悉地定成就。爰仏子聊飾瑜伽之壇場、敬調七日之行儀。運隨分之信力、獻三時之微供。所仰者三密加持之風、定転如理之供具、所憑者五智清浄之水、必洗龐惡之垢穢。伏冀、聖天降臨道場納受供具、照見弟子之丹誠、成就弟子之願念。

澄憲は、帰信し供養する者の願いをすべて成就するという歡喜天供養を、七日間にわたって行った旨を記している。「運隨分之信力」や「照見弟子之丹誠、成就弟子之願念」などから、かなり切実な思いを込めて願念成就を期し、真摯にこの供養を行おうとしている様子が窺われる。澄憲がこの表白で心にかけていたことは、主に二つの事柄である。

抑名利者出離之怨也、癡愛者輪廻之鎖也。仏子心中未能抛之。所恥也、所悲也。所謂雖無官職之希、猶有利養之望。雖悟因果之理、未截愛心之網。

澄憲は名利と癡愛という二つの欲望を捨てきれない自分の弱さを恥じながらも、それらから逃れることを強く願っているわけではないようである。そもそも歡喜天は、日本では子授けや夫婦和合、富貴財福の神として信仰されており、現世利益的な秘仏として祀られることが多い。どちらかといえば、「愛心之綱」を截つのではなく、愛心を成就する神なのである。澄憲は愛心の綱を截ちきれない自分の弱さを恥じつつも、その成就を願ってこの供養を行ったと考えられるのである。

このことについては、この聖天供が行われた二年後の承安二年（一一七二）に、高松院が澄憲の子、海恵を出産したことが角田文衛氏により指摘されており、この聖天供も高松院との愛心成就を願って行われた可能性が高い。海恵の出産年から、承安元年には澄憲と女院は深い関係にあったことが明らかであるが、この聖天供を行った際にはどうだったのだろうか。表白中には「無慚無愧、常居聚落、破戒破扇、苦在無間」とあることから、すでに密通関係にあったとも考えられる。

殊に、澄憲がもう一つ深く気にかけている名利の問題について、表白には以下のように記される。

二三年来、聊生覚悟。争辞遁官職、快結縁仏法。然君王之勅許難蒙、善種之因縁易失。非仏天加護者、何果遂願念哉。

この二、三年の間、澄憲は官職を通れたいという願いを持っていたが、君王（後白河法皇）の勅許は蒙り難く、願念を遂げることができないでいた。澄憲には道心から官職を通れたいという思いもなかったわけではないだろうが、この表白全体の供養の目的から考えると、高松院の異母兄であり、女院を妹としてかわいがっていた後白河法皇に仕えることが、女院との関係を密かに深めつつあった澄憲には、後ろめたく恐れ多いこ

とだったからではないだろうか。つまり、名利から逃れたいという告白も、高松院との愛心成就への思いと無関係ではなかったと考えられる。

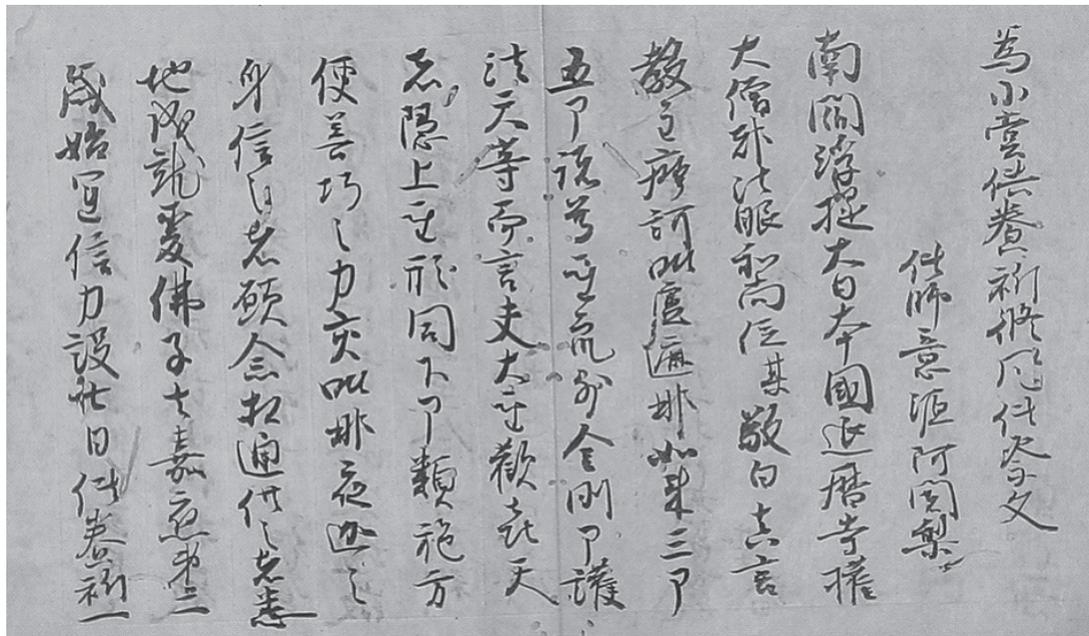
澄憲は嘉応元年（一一六九）六月には、後白河法皇の出家逆修の請僧や同じく法皇出家逆修初七日の導師、八月には御逆修結願の導師を勤めるなど、法皇の信任厚く、公の法会でも優れた表白や説法を披露していたが、内心では官職を辞すことも考えていたのである。この二、三年前に官職を辞したいと考えていたということは、この供養の二、三年前には女院に対して導師という立場を超えた、積極的な思いを抱くようになっていたのであろうか。澄憲は深く慙愧し苦悩しつつも、聖天に愛心成就を祈らずにはいられなかったのである。

② 歴博蔵『軔法輪鈔』一 仏供養・修法・結縁灌頂大旨・秘教「為小堂供養祈修同供祭文」

高松院の援助を受け、釈迦堂供養の祈りのために澄憲が行った聖天供の祭文である。末尾には「安元々年（一一七五）十二月十七日」に行われた旨が記されている。

爰仏子去嘉応第二歳始運信力、設七日供養、祈一心丹誠。自爾以来、或日々或月々、誦真言奉法施、設小供抽微信。去年冬天殊致七日供養、今年窮陰同設三時密壇。微功漸積、冥応宜至。今專所祈願者、為十方檀那三際恩所、抛随分淨財、刻尺迦尊像。明年四月欲儲齋会。

嘉応二年（一一七〇）に初めて聖天を信仰供養するようになったことが記され、①の表白「為自身祈令修聖天供祭文」の時から澄憲が聖天を供養し始めたことがわかる。嘉応二年から日々あるいは月々、聖天に法施を奉つたり小供を設けたりして、去年の冬にも七日供養を行い、今年の十二月にも供養を行っているところがあるが、今年の十二月の供養というの



は、この表白の時の供養を指す。繰り返して捧げてきた供養の功德が次第に積もり、冥応も顕れるようになったとして、さらに来年の四月には釈迦像を刻み、齋会を儲けようと計画している。澄憲が丹誠を込めて聖天供を継続的に行っていた様子が窺える。澄憲が聖天供養にどれほど思いと情熱を注いでいたのが伝わってくるが、澄憲が熱心に聖天供を行っている期間は、高松院との関係が深まった時期と重なっているのである。続いて表白には以下のように記される。

兼又禪定女院者大願檀那也。明年聊当厄会。必加擁護於宝体、比寿算於金剛。

ここで澄憲は、「禪定女院」（高松院）のために祈願する。来年は厄会に当たるとして、女院の宝体擁護と長寿を祈ったのである。

なぜ聖天供の中で、高松院の宝体擁護と長寿を祈る必要があったのだろうか。この聖天供が行われた翌年の安元二年（一一七六）六月十三日に高松院は崩御しているが、その原因は女院が澄憲の子を出産した際に腎臓を患い、早産による子宮出血が起こったためだったのではないかと角田氏により指摘されている<sup>(17)</sup>。さらにその時に出産したのは、八条院高倉だったかもしれないと田中貴子氏は推測している<sup>(18)</sup>。以上を踏まえると、本表白が作成された安元元年十二月には、高松院は澄憲の子を懐妊していたことになる。この表白で澄憲が特に祈っているのは、翌年に控えた女院の出産のことであると考えられ、女院の健康と安産とを願って、聖天供がなされたのであろう。

また、表白中には「因縁事合、情人願吾」と記され、高松院との結びつきがさらに確かなものとなるよう祈られている。

表白の末尾は以下のように結ばれる。

都先年祈願、雖無顯応、似有冥利。仍深抽信仰、常儲微供。今度祈請玄応答素意者、明年冬比必請壇場。願聖天速垂降臨、哀愍納受。敬白。

去年の祈願について、顕応はなかったが冥利はあったように思うとして、今度の祈請に玄応があったら、来年の冬頃に必ず供養を行いたいと記されるが、その願いも空しく、高松院は崩御する。澄憲の落胆と悲しみは、いかばかりであっただろうか。

#### ④ 高松院の崩御と澄憲による追善供養

高松院が崩御して、澄憲は何度か女院のための供養の導師を勤めたことが知られている。ここでは二つの供養表白を取り上げる。

① 金沢文庫蔵、澄憲「上素帖」高松院御周忌表(所蔵番号あひ)

表白中に「前院聖霊者、我等多年ノ薫主也。去年六月十二日、忽告无常之悲御キ」、「今日是遷化忌辰也」と記され、治承元年(一一七七)六月十二日に行われた、高松院の一周忌供養表白である。冒頭に「前高松院男女房、同志合掌、白仏法僧御前ニ云々」とあり、女院に仕えていた人々を中心となつて行つた御周忌供養である。続いて生死の別れ、分断の悲しみは古より変わらないことを述べ、高松院の生涯が回顧される。

伏惟、前院、出天潢之源、降仙萼之程、長格油陰下、養蘭殿袖内。仙洞春風、桃李粧漸媚塗山秋露ニ。蘭菊質儷濃ナリ。然間、少年早入籠籠宮、伴鶴禁ノ君、遂備三宮列、施四徳之誉ヲ。眼飽花月之興、耳倦絃管之音。身誇綺羅之服、情恐象外之楽。照陽殿翫花之庭、春日猶短、長秋宮望月簾惜、秋夜易曙。

女院は仙洞御所において美しく育ち、若くして皇后となつて申し分のない生活を送っていたことが記される。

然而、法皇雲駕不帰、橋山ノ風永咽、母儀月貌忽隱、湘浦ノ露空凝以来、悲辞専夜之恩、遂逃長生之宮。偷悟老病死之難、既深傷愛別離之易迷。漸及廿一之壯齡、忽落双花之飾、堅持五百之齋戒、伝波提、衣以来、池蓮花淀夏、想像八功德之波、宮槐葉落秋、相催十二觀。加之、五相成身之開胸、三密月懸心。十重戸羅纏身、五分香薰衣。加之、凶仏写経数、如恒沙。焼香散花積、類塵数。

皇后としての華やかな生活は長くは続かなかった。高松院は鳥羽法皇と美福門院の死を悲しみ、遂に御所を去つたのだという。ただし、美福門院は高松院が参内しなくなった永暦元年早春頃には存命であり、女院が御所を去つた直接的な理由として、両親の死を挙げることは難しい。高松院が里第に下がつたのは、二条天皇の女性関係に問題があつたためだとする指摘がなされており、それが最も大きな要因であろう。しかし、高松院は先述したように、出家後、両親のための追善供養を重んじており、澄憲自ら美福門院のための追善供養をしばしば導いていたことから、こうした解釈が施されたと考えられる。

嗚呼悲哉、露未乾、露今速消。花劔未粧ヨソハ。花容忽萎。諸受法不滿聖靈臨池之妙、悲而猶悲。

女院の死を深く悲しみ嘆く文面が綴られており、女院の死後一年経つても、なお悲しみが癒えない様子が伝わってくる。続いて、「又背聖靈御願之儀、今刻三尊」と記され、女院の御願に背いて、三尊像が刻ま

れたという。これについて、「嗚呼、三尊者夢後彫刻也、深憑四十八願之誓約」とあることから、三尊像は阿弥陀三尊であり、夢告に従って刻まれたらしいことがわかる。

抑、我等忽失壯年、空斷殷憂之腸<sup>ヲ</sup>。犬馬慕主之志、於今何為。  
葵<sup>クキクワク</sup> 藿<sup>クワク</sup> 向陽之思出、吾既已<sup>ヤミ</sup>。昔戴恩、來覺恩厚。心只醉慈悲之尊  
德、今生知非生、只摧恋慕高德<sup>（クセケチ）（ホトトギス）</sup>之<sup>（ホトトギス）</sup>。平生一仏之淨土。再拜<sup>奉</sup>  
慈悲之聖容<sup>ヲ</sup>、争会九品蓮。

「犬馬慕主」「葵藿向陽」「昔戴恩」など、女院に仕えていた人々の思いを代弁する表現が多く見られ、「争会九品蓮」と、浄土信仰に基づいて女院との後世の再会を期している。表白の最後は以下のように締めくくられている。

然則不如淨藏淨眼之生王宮者再莫生十善之王宮。□不如觀音妙音之現女身者、重莫為五障女身。善根無限、功德有隣三界我界混仏界、三乘五乘婦一乘<sup>一</sup>文。

淨藏と淨眼は、『法華經』妙莊嚴王本事品第二十七によると妙莊嚴王の王子で、外道に執着している父王を仏法に導いたとされる。彼らと對比させて、觀音と妙音天（弁財天）が重ねて五障女身とならないに越したことはないとして、高松院が女身に転生することがないように暗に示されている。五障のある女身への転生は一般的に忌避されたが、高松院の死因が、女性特有の出産による疾患であったため、特にこのことが覚えられたのであろう。

② 歴博蔵『転法輪鈔』仏供養・修法・結縁灌頂<sup>天台</sup>・秘教「十二天供表白」

高松院の没後、後白河法皇の綸旨によって、澄憲が行った十二天供の表白である。この表白は、金沢文庫蔵『転法輪鈔』密教帖では欠けており、貴重である。法会が行われた場所は、澄憲建立の浄仏寺（通称「七観音院」）であるという。<sup>(21)</sup>『京都府地誌』には「建久五年甲寅。内裏仁寿殿ノ二間安置ノ觀音像ヲ。烏丸六角町ニ移シ。堂宇ヲ建立ス。開基僧澄憲」とある。<sup>(22)</sup>建久五年に浄仏寺が開創されたという説と、表白中に「南瞻部州大日本国天台宗延暦寺前権大僧都法印大和高位澄憲依 後白川禅定法皇綸旨、為前高松女院建立一伽藍、安置前院御本尊并御筆五部大乘等」とあることから考えると、この十二天供は建久五年の寺院建立後、間もなく行われたか。ただし、後白河法皇は建久三年三月十三日に崩御しており、故人については表白中に「前高松女院」と記されているのに対し、法皇は故人として扱われていないので、建久三年以前にこの供養が行われた可能性もある。

女院の御本尊を安置し、御筆の五部大乘經を安置したということだが、『京都府地誌』に記された仁寿殿安置の觀音像が、女院の持仏であったのかは定かでない。  
続いて、「法皇綸命之上、弟子之懇懷也」とあるので、後白河法皇の綸旨であるだけでなく、澄憲自身も望んでこの供養を行っていることがわかる。

仏後壁奉図十八天。非啻堂舍莊嚴、蓋為護持仏法也。今仏弟子住此処、崇此精舍、為十八天、帰依渴仰。聊飾密壇、敬備微供。所設供具、備惡也、微少也。不足奉請善神諸天。然而既寄密壇傾密印、真言加持之力、願十八天哀愍、尚饗給<sup>へ</sup>。外書云、潢汗行浪之水、蘊繁蘊草之菜、若有明信、以可羞明神祭鬼神<sup>云々</sup>。此言宜哉。只以志為尊、以誠為潔。

仏の後ろの壁には十八天を囚し、澄憲はこの寺に住して十八天に帰依渴仰し、供養を行ったという。「潢汗行浪之水、蘋蘩藻草之菜、若有明信、以可羞明神祭鬼神<sup>云々</sup>」は、『春秋左氏伝』隱公三年の伝に、「苟有<sup>二</sup>明信<sup>一</sup>、澗谿沼時之毛、蘋蘩藟藻之菜、筐筥錡釜之器、潢汗行潦之水、可<sup>レ</sup>薦<sup>二</sup>於鬼神<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>羞<sup>二</sup>於王公<sup>一</sup>」<sup>(23)</sup>とあり、語句が多少異なるが、『春秋左氏伝』を典拠としているのであろうか。

澄憲が至らないながらも、女院のための追善供養を真摯に行おうとした様子が感じられる。表白の最後には、澄憲自身の当時の心境が述べられている。

仏子者悪縁遠離善因具足、心中却安念身上離病患。衣食具足徒類和順、念仏功積臨終正念、観音来迎得賢善死、普天卒土利益平等、一心丹誠諸天証知。

年を重ねた澄憲は、悪縁を離れて心中穏やかで病も回復し、満ち足りた静かな境地で臨終正念に向けて念仏の日々を過ごしていたようである。高松院との関係も、供養と祈りを重ねるうちに浄化された様子が伝わってくる。

## おわりに

以上、澄憲の手になる表白の検討によって、高松院と澄憲がどのような関係を深めていったのか、その一端が具体的に見えてきたように思う。

澄憲は、高松院の病を癒すための祈禱をしたり、美福門院のための追善供養の導師を勤めたりして、出家後の高松院の人生を導いてきた。二人の関係は、導師と施主という信仰を媒介とした積み重ねをとおして深

まっていたようである。

高松院は後半生の導き手として、十五歳年上の優れた唱導僧である澄憲を尊敬、信頼し、彼を重用した。澄憲もまた、聖天供表白に見られるように、高松院に対して導師という立場以上の感情を抱いて接し、女院の死後も懇ろな追善供養を営んで、女院とのつながりを保ち続けていたのである。

殊に澄憲が自身のために祈る時には、天供を行うことがしばしばあった。歴博蔵『転法輪鈔』仏供養・修法・結縁灌頂<sup>天台</sup>・秘教の帖には、澄憲自らのために行われた法会の表白として、「無動寺円運法印授受明許可表白」「尊勝念誦行法表白 自行」、さらに本稿で取り上げた「為自身祈令修聖天供祭文」「為小堂供養祈修同供祭文」「十二天供表白」の他に、澄憲が自身の厄払いのために行った「閻魔天供表白」<sup>(24)</sup>という六つの表白が収められているが、このうち四つが天供祭文である。

澄憲の表白は公や他者のために作成したものが大半を占め、それらからは澄憲の教養や巧みな表現力、教説や信仰などを読み取ることができ、澄憲の心情や内面を示すものは数少ない。そういった意味でも、高松院との関係性の中で自身の率直な心情を述べて祈願した天供の表白は大変貴重であり、今後の澄憲研究にとって有用な資料となり得るであろう。

(表) 高松院と澄憲の関係年譜及び関連表白作成年一覽

年号(西暦)	月日	事項
永暦元年 (一一六〇)?	八月一九日	高松院、病篤く、後日河法皇の御幸あり。病のため出家(『山槐記』『百鍊抄』)。
	八月二〇日	高松院、三七ヶ日法華三昧行法を行う(金沢文庫蔵、澄憲草「高松女院等置如法供養表白」)。
	九月一〇日	高松院、法華経誓号を行う(金沢文庫蔵、澄憲草「高松女院等置如法供養表白」)。
不明	八月二五日	高松院、去年の病の癒しを感謝して、澄憲を導師として日吉社七箇日金泥経供養を行う(金沢文庫蔵「転法輪鈔」高松院日吉社七箇日金泥御経供養開目「同結願表白」)。
不明	九月上旬	高松院、去年の病の癒しを感謝して、澄憲を導師として日吉社七箇日金泥経供養を行う(金沢文庫蔵「転法輪鈔」高松院日吉社七箇日金泥御経供養開目「同結願表白」)。
応保三年 (一一六三)	?月六日	高松院、澄憲を導師として鳥羽法皇と美福門院のために金光明経書写と舍利供養を行う(金沢文庫蔵・澄憲草「高松女院十箇日御修善結願表白」)。
不明	一月三日	高松院、澄憲を導師として美福門院御月忌のために百花供養を行う(醍醐寺蔵、澄憲「表白集」上「高松女院百花供養表白」)。
翌年	一月三日	高松院、澄憲を導師として美福門院御月忌のために一昼夜念仏供養を行う(金沢文庫蔵、澄憲草「高松院為母儀聖壽勸人書写観無量寿経十二卷并被修一昼夜念仏発願表白」)。
	?月三日	高松院、澄憲を導師として美福門院御月忌のために観無量寿経書写と一昼夜念仏供養を行う(金沢文庫蔵、澄憲草「高松院為母儀聖壽勸人書写観無量寿経十二卷并被修一昼夜念仏発願表白」)。
嘉応二年 (一一七〇)	四月一〇日	澄憲、聖天供を行う(歴博蔵「転法輪鈔」「為自身祈令修聖天供祭文」)。
承安二年 (一一七二)	不明	高松院、澄憲の子(後の海惠僧都)を出生する(『玉葉』「血脈類集記」)。
承安四年 (一一七四)	冬	澄憲、聖天供を行う(歴博蔵「転法輪鈔」「為小堂供養祈修同供祭文」)。

安元元年 (一一七五)	二月二七日	澄憲、高松院の後援により聖天供を行う(歴博蔵「転法輪鈔」「為小堂供養祈修同供祭文」)。
安元二年 (一一七六)	六月二三日 (二二日)	高松院、崩御(『玉葉』『玉皇記』『百鍊抄』)。 ※『帝王編年記』『二代要記』『歴代皇記』は二二日崩御とする。
安元三年 (一一七七)	六月二日	澄憲、高松院のために正日仏事の導師を勤める(金沢文庫蔵、澄憲「上素帖」「高松院御周忌表」、「愚昧記」)。
建久三年 (一一九二)	三月十三日	澄憲、高松院のために曼荼羅供養を行う(『三僧記』)。
建久五年 (一一九四)?	不明	澄憲、後日河法皇の御旨により、澄憲自ら建立した浄仏寺で高松院のために十三天供を行う(歴博蔵「転法輪鈔」「十三天供表白」)。

註

- (1) 角田文衛「高松女院」(同著『王朝の明暗』、東京堂出版、一九七七所収)。田中貫子「八条院高倉の出生と出家―来迎寺文書の資料など―」(広島大学『国文学』一一八、一九八八・六)。その他に、阿部泰郎「中世南都の宗教と芸能」(『国語と国文学』六四―五、一九八七)や細川涼一「王権と尼寺」(同著『女の中世小野小町・巴・その他』、日本エディタースクール出版部、一九八九所収)においても、八条院高倉が澄憲と高松院との間に生まれた娘であることを指摘している。
- (2) 註(1)角田氏論文参照。
- (3) 増補史料大成『山槐記』、臨川書店、一九六五
- (4) 阿部美香氏の御教示による。『五寸四方の文学世界―重要文化財「称名寺聖教」唱導資料目録―』、神奈川県立金沢文庫、二〇〇八の一―一ページの目録に記載。
- (5) 永井義憲・清水有聖編『安居院唱導資料集』上、角川書店、一九七二の二八八ページ。「同結願表白於十禅師宮」被結願之の引用もこれによる。
- (6) 牧野和夫「鎌倉初・前期成立十二巻本『表白集』伝本の基礎的調査とその周辺(1)・「類聚」ということ」(『実践国文学』三五、一九八九・三)。
- (7) 小峯和明『中世法会文芸論』、笠間書院、二〇〇九の二二九―二三〇ページ。同氏は、「転法輪鈔」などにも日吉社をめぐる表白はすくなくならずあり、天台の教説からみても深いかかわりがあったことがうかがえる(二二四ページ)とも

指摘されている。

- (8) 註(4)に同じ。
- (9) 『愚昧記』仁安二年七月二日条や『玉葉』承安三年七月一日条など。
- (10) 牧野和夫「安居院唱導と『母恩勝父恩事』」(『実践国文学』四〇、一九九二)。  
阿部泰郎氏の翻刻「釈門秘鑰」解題には、「注目すべきは『釈門秘鑰』(『母恩勝父恩事』)の釈の末で、『此事、予始独覚之、顯宗学者説法師、古来雖多、全所不思議也』と説いていることである」とあり、澄憲がこの説を自説として自負していたことが指摘される(阿部泰郎「仁和寺藏『釈門秘鑰』翻刻と解題」(『国文学研究資料館』調査研究報告一七、一九九六)。小峯和明氏は澄憲の母恩重視について、「澄憲の抱く血族の意識が母恩を重んずる教義を必然的にはぐくんだのであるう。(中略)澄憲は自己正当化も合わせ、悲母の供養の重視を安居院の教線拡張や権威化の戦略としたのであるう」という(註7小峯氏著書の二二二ページ)。
- (11) 註(1) 角田氏論文参照。
- (12) 「母の恩の強調は一般の仏事に『悲母』追善が多いこともあわせ、人々の心情に訴えるに恰好の対象であったからでもあろう(註7小峯氏著書の二二二ページ)。
- (13) 『表白集』(『統群書類従』第二十八輯上、巻第八百二十五、統群書類従完成会、一九八三)には、八条院が美福門院のために毎月恒例の追善供養を行った際の「八条女院舍利講表白」が収められている。金沢文庫保管、二十二巻本『表白集』巻二十にも、「八条院奉為美福門院毎月舍利供養表白」と題する表白が三点所収される(牧野和夫「仲範撰述の一書『持犯要記俗書勘文抄』」紹介と翻印、附二二巻本『表白集』目録一覽等一(『実践国文学』四二、一九九二・九)。
- (14) 正治二年十一月二十三日条に「小時參安樂壽院、人々未參、奉行院司範宗每事不覚、書違御教書、御導師違乱、自御所被請聖覚」、建仁元年十一月二十三日条に「巳時參鳥羽殿、未時許被始講延、聖覚為講師」、承元二年十一月二十三日条に「參鳥羽殿、公卿三位公清卿一人、聖覚講師」とある(早川順三郎編『明月記』、国文名著刊行会、一九三五)。
- (15) 註(1) 角田氏論文には、『玉葉』建久二年四月二十四日条の「今日、澄憲真弟子(御室御弟子、高松院御腹、澄憲令生之子也、雖密事人皆知之、於仁和寺受戒灌頂、依訪其事行向(福田豊彦監修『吾妻鏡・玉葉データベース』、吉川弘文館、一九九九)という記事を受けて、「明らかにこれは、建久二年四月廿三日の深更に灌頂が授けられた海恵を指している。兼実は、朝早く後朝の布施を持って仁和寺の南院に赴いたのである。摂政従一位の藤原兼実がわざわざ朝まだきに仁和寺に駆けつけたのは、海恵が澄憲の単なる息子ではなく、高松女院を母としていたからである(四六八ページ)とある。
- (16) 『兵範記』嘉応元年六月十七日、『玉葉』嘉応元年六月十七日条、『転法輪鈔』表白二・後白河院上中(一七) 嘉応御逆修初七日表白」(一七) 御出家後始五十日御逆修結願表白(八月八日)など。
- (17) 註(1) 角田氏論文参照。
- (18) 註(1) 田中氏論文参照。
- (19) 阿部美香氏、説話文学会・仏教文学会合同十二月例会(二〇〇九年十二月十二日、於金沢文庫)発表資料「安居院唱導資料『上素帖』について」参照(後に『金沢文庫研究』三三六、二〇一三に報告されている)。阿部氏によれば、『上素帖』は重要文化財「称名寺聖教」中で最古の安居院唱導資料であり、計二十三点の表白を集めた、澄憲の表白集である。引用も阿部美香氏作成の翻刻による。
- (20) 註(1) 角田氏論文と、西井芳子「高松院 女の業に悩む后」(『国文学』解題と教材の研究』二五―三三、一九八〇・一〇)。
- (21) 山崎誠「『転法輪鈔』繫年考」(『国文学研究資料館紀要 文学研究篇』三三三、二〇〇七・二)。
- (22) 水荃玉菜他編『京都府地誌』京都市街誌料・第五、一八八一の「七観音院」の項。
- (23) 鎌田正、新釈漢文大系第30巻『春秋左氏伝』一、明治書院、一九七一の六一ページ。
- (24) 表題不明。山崎誠氏の付けた仮題による(註21山崎氏論文参照)。
- 〔付記〕  
本稿をなすにあたり、お世話になりました神奈川県立金沢文庫、御指導・御教示下さいました阿部泰郎氏、阿部美香氏に記して御礼申し上げます。  
(金城学院大学非常勤講師、国立歴史民俗博物館共同研究員)  
(二〇一二年七月二三日受付、二〇一四年三月一八日審査終了)

---

## On Takamatsu'in and Chōken : Focusing on an Examination of the *Hyōbyaku* of Chōken

TSUTSUI Sanae

Takamatsu'in Shushi was the empress of Emperor Nijō, but their married life together lasted a mere four years. Thereafter, she took the tonsure and was elevated to the ranks of the *nyoin* (retired empresses) and came to be called Takamatsu'in. She was thought to have spent a serene life in Buddhist practice, but, as Tsunoda Bun'ei and Tanaka Takako have made clear, she secretly had two children (one, Kaie was to become an important monk at Ninnaji and the other Takakura became a lady-in-waiting for Hachijō'in) with the famed Buddhist preacher Chōken, and her early death was the result of giving birth to Chōken's child.

Based on these studies, the sexual relationship between Takamatsu'in and Chōken has been made clear, but because this scholarship was based chiefly on analyses of fragmentary records in diaries and temple documents, the specifics of the relationship have not been clarified. In this article I chiefly examine the contents of the *hyōbyaku* (pronouncements read out at Buddhist services) found in the manuscript of the *Tenpōrinshō* in the Kyū-Tanaka-ke collection at the National Museum of Japanese History and also those composed by Chōken at Kanazawa Bunko as they reveal the relationship with Takamatsu'in and then re-evaluate relationship between the two.

Chōken offered prayers to cure the illness of Takamatsu'in and led memorial services for Bifukumon'in, her mother, thus playing a leading role in the life of Takamatsu'in. One can rightly say that the relationship between the two grew deeper through the repeated experience of being sponsor and officiating monk in these religious contexts.

In the latter part of her life, Takamatsu'in came to respect and rely on the 15-year-old Chōken, who excelled as a preacher, for guidance. Chōken, too, as can be seen in his "Shōten-gu hyōbyaku," (Pronouncement for the offering service to Shōten), felt more for Takamatsu'in than would be expected of an officiating monk. After her death, he attentively led memorial services and thus maintained his bonds with the *nyoin*.

The majority of Chōken's *hyōbyaku* were composed for the court or others, and while one can discern Chōken's cultivation, the eloquence of his preaching, and faith in these efforts, those that reveal his true feelings and inner thoughts are few in number. In this sense also, the *hyōbyaku* for the Shōten offering service in which he states forthrightly his own feelings regarding his relationship with

---

Takamatsu'in is extremely valuable, and is indicative of the potential of *hyōbyaku* as useful sources in future studies of Chōken.

Key words: Takamatsu'in, Chōken, *Hyōbyaku*, *Tenpōrinshō*, shōdō